



図書たより

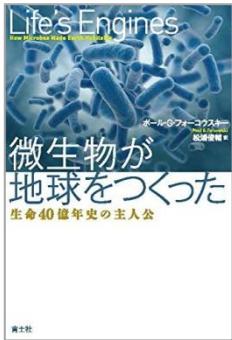
NO. 16

June 2016

明治大学中野図書館

図書館員オススメの本

【ポール・G・フォーカウスキー著『微生物が地球をつくった：生命40億年史の主人公』青土社、2015】



微生物は26億年前の化石に痕跡があったという。黒海の調査の話がでてくる。黒海は水深150メートルから下に酸素がない。その少し上1mほどの層で光合成をする微生物がいる。酸素は作らない、硫化水素を分解し水素を使って有機物を作り、太古の微生物と共通している。すべての生物の細胞にはリボソームというものがある。リボソームは3種類に分類できる(動物とキノコは近いという!)、そして全ての生物は何らかの微生物から進化したのがわかっている。昔高校で生物のエネルギーはATPだと習った。微生物も作るしくみは共通で、壁をはさんだ電荷の勾配による(言わばナノマシン)。真核生物の細胞にあるミトコンドリアはATPの生成に関係し、酸素があると多くのエネルギーが生まれる。地球に酸素をみだしたのも微生物だし(24億年前の大変化)、ミトコンドリアは微生物が微生物を飲み込んでできて、我々の細胞にも共生している。過去には多くの生物大絶滅があったが、微生物は生き残り、コヤ遺伝子なるものを守った。ぜひ壮大な歴史としくみを読んでみてほしい。最後に人類は地球や生物を守れているのかという問題が再浮上している。

【工藤律子著『ルポ雇用なしで生きる：スペイン発「もうひとつの生き方」への挑戦』岩波書店、2016】



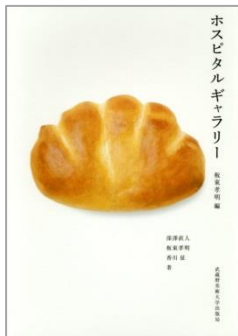
今世紀最大のリークとも言われ、世界中で話題となっている“パナマ文書”のタックスヘイブン(租税回避地)を使い、多くの指導者や有名人、グローバル企業が税金逃れをしていたのではと報道されている。多くの人がこの騒動を通じて「1%の金持ちが99%の普通の人の運命を握っている」という大きな矛盾に、あらためて気づいたのではないだろうか。本書は、2008年の金融危機以降、深刻な不況と高い失業率(若者の失業率は一時55%にもなった)で苦しんでいるスペインにおける市民の取り組みが紹介されている。それは、時間を交換単位として銀行に参加するメンバー間でサービスのやり取りをする「時間銀行」の仕組みや、進化した「地域通貨」などを活用することで「雇用なし」「働かない」という意味ではないで生きるための活動である。政府や企業の支配から逃れ、共同体で支え合って生きる社会を模索する動きは世界的潮流となっており、今後の日本でも大いに参考になるだろう。

【高野秀行著『恋するソマリア』集英社、2015】



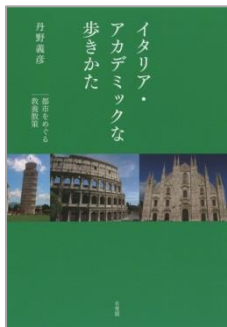
武装勢力や海賊が跋扈するソマリア。その中に平和に暮らしているという独立国ソマリランド取材した『謎の独立国家ソマリランド：そして海賊国家ピントランドと戦国南部ソマリア』で講談社ノンフィクション賞を受賞した著者。本作はその続編とも言える作品だが、前作を読んでいなくても楽しめる。前作より少し柔らかい内容で、著者はソマリアの「恋」ゆえに、言語・音楽・料理へと果敢に飛び込んでいく。吹き出してしまうようなトラブル続き・・・と思いきや、「戦場」を再認識させる命がけの一幕も。スピード感あふれる筆致で、読んでいる自分もソマリアを旅している気持ちになれる1冊。

【板東孝明編：深澤直人，板東孝明，香川征著『ホスピタルギャラリー』
武蔵野美術大学出版局，2016】



表紙にはおいしいそうなクリームパン。裏表紙には目盛のついた蚊取り線香。なんだろうと本書を手にとると、それらは武蔵野美術大学の「形態論」の授業の課題作品で、それぞれの課題は、クリームパンは「手」、蚊取り線香は「じょうぎ」だということ。おもしろい！思わず笑みがこぼれる。「病院の待合室で不安な気持ちでいる人に、デザインは何ができるだろう？」という考えのもと、武蔵野美術大学と徳島大学病院が協力して2009年にオープンしたホスピタルギャラリーbeo本書ではこれまでにここに展示された武蔵野美術大学の学生作品と徳島県在住作家の作品が、「感想ノート」に書き込まれたコメントとともに紹介されている。ギャラリーを訪れた人々の声を通して、それぞれの作品が持つ雰囲気と作品に触れることで生まれた人々の感情が臨場感をもって伝わってくる。作品鑑賞だけでなく、空間デザインのお手本としてもおすすめしたい一冊だ。

【丹野義彦著『イタリア・アカデミックな歩きかた：都市をめぐる教養散策』有斐閣，2015】



世界最初の大学といわれているボローニャ大学は、学生主体によるものであったという。今でいう社会人学生が主だったとはいえ、学長も学生が務め、教師は学生たちによって雇われていたというから驚きだ。さて、本書のテーマは「大学散歩」である。大学発祥の地でもあるイタリアの9つの都市を巡りながら、大学や関連する学術施設、名所を訪ね歩く。大学散歩などして面白いのだろうかと思うかもしれない。しかしながら、本書を読むと、大学の誕生をはじめとした学問の発展がこの国や都市の文化や歴史、社会的背景と密接に関わっていたことがよくわかる。今、傾いたピサの斜塔を支え、水没の危機にあるヴェネツィアの街を救おうとしているのは科学テクノロジーであるという。一方で、古代よりキリスト教の中心地であったローマでは学問や科学を弾圧してきた歴史を抱えている。そのほかにも各都市や施設について文学や芸術、歴史など様々な観点から解説している。また、著者は本書とインターネットを利用したバーチャルツアーをすすめている。読みやすい文章はガイドを聞いているようで、著者とともに現地を旅した気分になれる。イタリアの新たな魅力を知ることができる1冊だ。

図書館からのお知らせ

図書館内でゼミガイダンスを行っております。ガイダンス中は説明等で騒がしくなることがあります。申し訳ありませんがご了承ください。